



Title	ユング＝シュティリングの「熱狂」評価（承前）： 『テオバルトあるいは熱狂者たち』（1784/85）に おけるテルステーゲン評価を手がかりに
Author(s)	長谷川，健一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2023, 20, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92462
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ユング＝シュティリングの「熱狂」評価（承前）

—『テオバルトあるいは熱狂者たち』（1784/85） におけるテルステーゲン評価を手がかりに—

長谷川 健一

はじめに

ユング＝シュティリング（1740–1817、以下ユングと略記）の長編小説『テオバルトあるいは熱狂者たち』（1784/85）（以下『テオバルト』と略記）には、架空ではなく、実在した人物としてゲルハルト・テルステーゲン（1697–1769）が登場する。テルステーゲンは18世紀ドイツ文学史に残した数々の優れた宗教詩でその名を知られ、彼が作詞した賛美歌（「主のみまへにて」 *Gott ist gegenwärtig*¹等）は世界中で親しまれている。あくまで平信徒であったが、その敬虔な信仰を通じて18世紀ドイツ北西部ニーダーラインとその周辺地域に持続的な影響を及ぼし、現在では「ドイツにおける改革派の敬虔主義において最も重要な人物」²の一人とみなされている。ユング自身もその影響から無縁ではなかった。

両者の人生には29年の重なりがあるが、直接の交流があったという記録は残されていない。しかし、ユングとテルステーゲン信奉者との間には少なからぬ交流があった。ただし、その関係は決して良好なものとは言えなかった。ユングが開業医として過ごした時期、すなわちエルバーフェルト時代（1772–1778）に味わった、深い苦しみと苦い体験の一因は、まさに彼らとの関係に由来するものだったからである³。本論文で考察対象とする『テオバルト』はユングがエルバーフェルトの地を離れてから数年後に刊行された作品となる⁴。テルステーゲンとその信奉者の記述に割かれた紙数は多くはないが、当時のユングの問題意識がここに凝縮されているように思われる。ただし、彼ら进行评估する姿勢はあくまで「非党派的」なものであった。

これまでの『テオバルト』研究では、ユングの「非党派的」な姿勢あるいはテルステーゲン評価の実情に十分な注意が払われてこなかった。例えばハーンも、この時期のテルステーゲン評価としては否定的な要素のみを指摘し、後年になってその評価が好転したというような見方をしている⁵。これに対して、そうした分析は一面的であり、ユングによる批判も十分に検討されていないと指摘したヴィンケは、ユングのテルステーゲン評価が現れたさまざまな著作、あるいは書簡等を用いて俯瞰的に分析し⁶、どの時期にも肯定面と否定面が入り混じった評価が見られると述べる。その大きな理由として挙げられているのが、ユングとテルステーゲン信奉者の関係性である。

たしかにこの問題は根深いものであったため、本考察においても看過できない。しかしながら『テオバルト』におけるテルステーゲン評価とその意義は、やはりこの時期のユングの問題意識を、より大きな時代の文脈、すなわち、信仰における「熱狂」の問題とのかかわりも踏まえて考察する必要がある。テルステーゲンについて肯定的な評価と否定的な評価の両方が見られるのは事実だが、ユングの信仰姿勢と同様に、テルステーゲン評価も常に同じだったわけではなく、その理由付けにも時期ごとの変化が見られるからである。

この小説では、ユング自身の姿が投影された主人公テオバルトがさまざまな「熱狂者」と出会い、その度に訪れる苦難や試練をいかに克服して独自の信仰の道に至ったかが描かれる。ここで言う独自の信仰の道とは、前稿で考察を加えた「中間の道」のことである⁷。これは序文において「不信仰」と「熱狂」の間を通る道（JT9）と説明されているが、テルステーゲン評価については、後者の「熱狂」との関連でなされており、同時代のキリスト教が直面していた危機に対するユングの問題意識と接続されている。そのため、決してユングとテルステーゲン信奉者の関係性に収斂される問題ではないのである。

以下本論では、こうしたユングの「熱狂」評価とどのように結びついているかに注意を払いながら、テルステーゲン評価の実態を探りたい。

1. ユングから見たテルステーゲン

まずはテルステーゲンの半生を概観し⁸、そのうえで、ユングがどのような情報を知り得ていたか、どのような点に着目して紹介しているかについて、テキストに即して確認したい。

1-1. 生い立ち

1697年、テルステーゲンは9人兄弟の8番目としてライン河畔の町メールス Moers⁹で生まれた。彼は学校で優秀な成績を収め、早い時期から頭角を現していたが、父を早くに亡くしたため学業を継続できず、母親の方針にしたがい、ミュールハイム Mülheim¹⁰で商売を営む親戚のもとへ見習い修行に出された。この時期のテルステーゲンについて、ユングは「彼の魂は、知性と心がともに完全なものとなることを目指した。当然のことながら、その完全性をただひたすらキリスト教において求めた」（JT277）と述べ、若い頃から信仰の道を志す強い意志を持っていた点を確認している。

4年間の見習い期間を終えた後、独立して商売を営む道に進むが、静かに思索すること、信仰のための読書をすることもできないため、仕事を変える決意する。選んだのは亜麻布織り職人の道だった。ところが、この仕事は彼の弱い体には堪えたため、負担がそこまではかからないリボン織り職人となる。こうして彼は仕事をしながらも、人々との交わ

りがほとんどない孤独な生活に身を投じたが、心の静けさが得られるなかで敬虔な日々を過ごせるようになった。その後の信仰活動の基礎は、まさにこうした時期の読書と思索によって培われたと考えられる。

1-2. 神秘主義との関係

『テオバルト』におけるテルステーゲンの生い立ちについての描写は、あくまで簡潔なものだが、それは敢えて内容を絞った結果に過ぎない。ユングはテルステーゲンについてかなり詳しく知っていた。彼の著作についても、本文ではカトリックの聖人の伝記を集めた『聖なる魂の精選された伝記』全三巻 *Auserlesenen Lebens-Beschreibungen Heiliger Seelen* (1733-1753)、賛美歌、そして宗教詩が挙げられているのみだが、実際は数多く読んでいた¹¹。そのため次のように語られるのである。

ここでもし私が彼の著作をすべて伝え、彼の生涯を詳しく書こうとすると、あまりにも冗長になり過ぎるだろう。したがって、彼の生涯と性格のうち、最も重要な点のみ挙げることでよしとしておこう。テルステーゲンは、その振る舞いにおいて極めて感じがよく、親切な人物だった。快活で生き生きとしていながら、付き合いにおいては真面目で改まった態度をとっていた。彼は、はじめのうち厳格な神秘主義者だったが、次第にその教えを和らげていき、それに福音主義的な形を与えた。(JT278f.)

テルステーゲンの生涯について述べるなかで、ユングが特に注目しているのは、上記の引用にあるように「神秘主義」*Mystik* からの影響である¹²。これとの関連で見ておきたいのは『テオバルト』で言及されている以下の三点である。

一点目は、ミュールハイムとその周辺地域に及んでいた神秘主義の影響についてである。『テオバルト』では、この時代、すなわち 18 世紀の最初の 20 年間、この地域でペーター・ポワレ (1646-1719)¹³ がとても有名だったこと、フェヌロン (1651-1715) やマダム・ギュイヨン (1648-1717) のことが人々の記憶に新しかったこと¹⁴、ホフマンの影響が及び始めていたことが指摘される。そして「その周辺では、すべてが妙なる神秘思想のなかで営まれていた」(JT277) という。テルステーゲンは基本的には改革派教会に属していたが、こうした神秘主義者たちの思想の影響のもとで自らの信仰の基盤を築いていたことが明示されているのである。

二点目は、上で言及したホフマン、すなわち、同時代の神秘主義の影響を受け、説教師としてこの地域で活動し注目を集めていたヴィルヘルム・ホフマン (1685-1746) との関係が取り上げられていることである¹⁵。両者の関係は良好なもので、テルステーゲンは「彼から多くのことを学んだ」(JT278) という。ラテン語学校時代にさまざまな言語に関する基礎的な素養はすでに身に付けていたが、必要な本を原書で読み、翻訳出版できるようにな

ったのは、ホフマンの手ほどきがあったからである¹⁶。気の置けない友情は生涯に亘って続いた。

『テーオバルト』によれば、テルステーゲンはこのホフマンが主宰したサークルに入り、そこで神秘主義の教えを学んだとされているが、興味深いことに、彼が若くして体を壊してしまった理由はこの教えを厳格に実践した結果とみなされている。ユングはこうした極端に厳しい信仰生活のことを「過剰な熱狂」*dem übertriebenen Enthusiasmus* (JT278) という表現で評しているが、その直後に、現代の若い人々に比べれば尊敬に値すると述べている。そのためこのくだりでは、テルステーゲンを批判するというよりは、若い時期の彼の信仰の強さを印象付けようとする意図が感じられる¹⁷。

三点目は、テルステーゲンの信仰姿勢に関する説明である。先ほどの引用によれば、最終的にテルステーゲンは、厳格な神秘主義から、福音主義的な特徴を帯びた神秘主義に移行したという。それは具体的にどのようなものだったのか。まず、以下のように説明される。

彼の信条は簡潔に言えば次のようなものだった。

人間は、可能な限り完全になるという容易にはなし得ない決心をしなければならない。テルステーゲンが模範としたのは、救い主の教えと生涯であった。そのための手段としたのは、神の現在のもとで生きることであった。つまり、持続的に内省し、神と親しく交わることである。魂のなかで生じることに絶えず注意を向ける、つまりは、神に相応しくないあらゆる思いをそれが生まれる時点において抑えるというものである。(JT279)

次に、こうした修行には「不断の祈り」あるいは「内的な祈り」が結び付けられなければならないという。この祈りの本質は、絶えず神に思いを傾けて、ほんの些細なことに至るまですべてを神に委ねることにある。これらはすべて「永続的な静寂のなかで」そして「神の前で内面的な死を経験する」ことで行われる。さらに、このような信仰実践を容易にするためには、職業が許す限りにおいて、世間を離れた孤独な生活のなかに身を置かねばならないという (JT279)。こうした一連の説明からは、静寂主義的な特徴と同時に、たしかに、彼が若い頃に実践していた「過度な節制を伴う」(JT278) 厳格な神秘主義からの変化が読み取れる。

以上のように『テーオバルト』には、テルステーゲンの信仰のなかに生涯に亘って神秘主義的な要素が息づいていたことがはっきりと示されている。ユングのテルステーゲン評価に神秘主義に対する評価も含まれるのはそのためである。この点については後ほど触れることにしたい。

2. テルスターゲン評価と「熱狂」

では、テルスターゲンは具体的にどのように評価されているのだろうか。ここでは主に肯定的な評価に注目して検討したい。

2-1. 「熱狂」による信仰の促進について

「はじめに」で触れたように、ユングのテルスターゲン評価として押さえておかねばならないのは、「非党派的」な評価姿勢についてである¹⁸。ここにはユングが愛読した『非党派的な教会と異端者の歴史』(1699/1700)の著者ゴットフリート・アルノルト(1666-1714)から継承した評価態度が表れている。それゆえ、彼のテルスターゲン評価は、以下のような書き出しで始まる。

ありとあらゆる意義深い熱狂、無意味な熱狂が登場していた頃、オランダのミュールハイム・アン・デア・ルーアに、どの点から見ても敬意を払うに値する注目すべき人物が暮らしていた。よく知られている面もあれば、正しく理解されていない面もある、故ゲルハルト・テルスターゲン¹⁹のことである。かつて、ドイツ全土に影響を与え、その著作で今なお影響を与え続けている教師、それこそがこの人物である。私がここで言うことに驚かないでいただきたい。彼が影響を及ぼした範囲は広くはなかったが、庶民には他の階層の人びとよりも強い影響を及ぼすことになったのである。必要かつきわめて有益なのは、テルスターゲンのことを非党派的に語ることである。というのも、テルスターゲンの頭のまわりに見える(…)聖なる輝きゆえに、この偉大で高貴なドイツ人を嘲笑する人もいれば、彼の偉大な功績を吟味し、正当な評価を与えるための労さえ執らない人もいるからである。(JT277)

ユング自身はここで「どの点から見ても敬意を払うに値する注目すべき人物」と述べているが、世間の評価は必ずしもそうではなかったという認識が窺える。「非党派的」な評価と謳っている以上、この後の記述において、肯定的な評価と否定的な評価の両方が表明されるのは言うまでもない。しかし冒頭で述べられている評価の基調としては、これまで不当な評価を受けてきたテルスターゲンを肯定的に評価しようという意思が感じられる。

さらに、上掲の引用冒頭で「熱狂」ないしは「熱狂主義」と訳しうる *Schwärmerei* の語が使用されている点に注目しておきたい。第1部第1章「熱狂主義の歴史」でユングが試みた *Schwärmer* の定義と同様に、*Schwärmerei* という語も肯定的な意味(*Enthusiasmus*)と否定的な意味(*Fanatismus*)を含み持っている²⁰。どちらの意味で用いられているかは文脈で判断する必要があるが、ここでは *Schwärmerei* が両方の意味で用いられており、それぞれの意味内容が *Schwärmerei* の後ろに置かれた2格の名詞 *des Sinns* と *des Unsinnns* によっ

て説明されている。

しかし、Schwärmer や Schwärmerei の語がテルステーゲン自身の評価に用いられることはない。用いられているのは、あくまで Enthusiasmus のみである。さきほど言及したように「過剰な熱狂」という使い方も見られるが、専ら肯定的な意味内容を含み持つとされる Enthusiasmus のみを用いているのである。こうした姿勢には、テルステーゲンの否定的な評価を再考し、少しでも肯定的な方向に修正しようという意気込みのようなものが伺える。次の引用にはこうした姿勢がよく表れている。

今日の私たちの干からびた道徳など、純粹で崇高な熱狂 (Enthusiasmus) を伴わなければ殆ど効力を持たないだろう。この熱狂があればこそ信仰の実践も容易になるのだ。このような熱狂 (Enthusiasmus) をテルステーゲンは吹き込んでくれるのだ。一言で言えば、彼は素晴らしい人物だった！その福音は、世俗の賢人にとっては愚かなものかもしれないが、事実、使徒の時代のいかなる者よりも、多くの真のキリスト教徒を生み出したのである。(JT279)

人々の心に信仰の火を灯し、実践に向かわせたことが、まさにテルステーゲンの純粹で崇高な「熱狂」Enthusiasmus が成し得た功績として理解されていることが分かる。このような「熱狂」理解との関連で思い起こされるのは、ロマン派の詩人ノヴァーリスが後に『断章と研究』(1799/1800) のなかに記した「説教師は、まずもって熱狂 (Enthusiasmus) をかきたてるように努めなければならない——というのも、熱狂こそが宗教を構成する要素だからである。どの言葉も明解で、熱く、心がこもったものでなければならない」²¹という一節である。

ユングは『テオバルト』で信仰における「熱狂」の問題をとりあげたが、前稿でも触れたように「熱狂」を完全に排除する意図からではなかった。Enthusiast や Enthusiasmus に肯定的な意義を与えていたのはそのためだった。それゆえユングにとっても Enthusiasmus としての「熱狂」は宗教に不可欠の構成要素だったのである。

2-2. 集会の開催の問題について

テルステーゲンは先に述べたホフマンのような説教師ではなかったが、彼の依頼によりすでに 1727 年からホフマン主宰の集会に参加している。また、1750 年代に入ると自ら集会を開催して講話を行っている。そういう意味ではテルステーゲンも説教師と同じように多くの信徒を前に話をし、人々に「熱狂」Enthusiasmus を吹き込み、彼らの信仰を促進する活動を行っていたと言えるだろう。

ところが不思議なことに、いわばテルステーゲンの名を知らしめた集会の開催とそこでの講話に関して『テオバルト』では一切触れられていない。手紙を通じた牧会活動を広

く行っていたこと、彼の著作が飛ぶように売れていたことには触れられている一方で（JT279）、ホフマンが主宰する集会に参加したこと、自ら集会を開催したこと、そこで講話したという事実が書かれていないのである。こうした点にもまた、彼を肯定的に評価しようとするユングの姿勢が表れているように思われる。以下で検討を加えていきたい。

前稿の第3章「集会の危険性」で考察したように²²、ユングは、狂信的な熱狂を不可避免的に呼び込む可能性のある集会の開催を批判していた。ただし、主人公テーオバルトの口を借りて、一定の条件さえ満たしていれば「そうした敬虔な時間は、思慮深く賢いやり方に導かれて、限りなく有意義なものになるだろう」（JT294）と述べ、その条件のなかに説教師を監督者として同席させるという点を挙げていた。

この点を踏まえると、1720年代にテルステーゲンが参加した集会には説教師ホフマンがいたため、ユングの批判は該当しないケースのように思える。しかしホフマンは教会の公的資格を持った説教師ではなかった。しかも彼の集会は必ずしも当局の許可を得て開催されたものではなかった²³。また、1750年代にテルステーゲン自らが主宰した集会にホフマンの姿はなかった。すでにこの世を去っていたからである。こうしたことを踏まえると、『テーオバルト』でテルステーゲンが関与した集会や講話のことが語られない理由は、ただ単に、テルステーゲンにとって都合の悪い事実を伏せておくためだったということになるのだろうか。

結論を先に述べておこなうならば、おそらくはそうではなく、ユングはテルステーゲンの集会や講話を正当なものと認めたうえで、あえて『テーオバルト』での言及は避けたのではないかと考えられる。この点について考えるため、まずは『テーオバルト』第1部第1章におけるユングの発言に注目しておきたい。ここでは説教師ホーホマンが、集会での説教を教会当局に禁じられ、拘留されたというエピソードが語られる（JT25f.）。この話に続けてユングは、警察権力はホーホマンの集会を許容しないので、政府や教会当局が彼を訴追し、説教を禁じたのは正しかったと考える読者がいるなら、それに反論しておきたいとして、次のように答えるのである。

これに対して私はこう答える。許されないのが当然とされる秘密集会や隠れた場所で行う説教（Conventikel und Winkelpredigten）とは、人々がひそかに教えあったり、一緒に集まったりする、特定の人しか参加を許されていない集会ないしは説教のことを言います。こうした会合は、少なくとも当局自らがその秘密に関与していない限り、許されていないものです。しかし、ある人が公的に演説を行い、人々が公的に集まり、誰もが自由に出入りできる場合は、そのような講話と会合の場に、まずは自らが立ち会うか、ひそかに分別のある人々を立ち合わせるのが、当局と聖職者の義務なのです。つまり、まずは、その催しが宗教の信条や国家の原則にとって有益なものか、あるいは妨げとなるか、その場合、どの程度そうなのかを吟味するということです。前者の場合は、どの聖職者もどの役人もモーゼのように考えるべきです。すなわち「願わく

ば、主のすべての民が予言者であってほしい！」と。後者の場合は、やはり十分注意しなくてはなりません。なぜなら、熱狂者（Schwärmer）というものは、どんなに然るべき罰を受けたとしても、私は神のために苦しんでいる、と考えるため、信奉者の数がそれだけいっそう増えるからです。（JT26）

ユングはここで、処罰や取り締まりの対象となるべき集会と、そうでない集会とを区別している。前者は私的に開催され、参加者が関係者に限定された極めて閉じられた集会であり、後者は公の場で開催され、参加者を限定しない外部に開かれた集会である。もっとも、後者であればどんな集会でも許されるわけではなく、政府や教会が関係者を参加させて集会の内容を吟味する必要があると述べる。そして是か非かの判断基準は「宗教の信条や国家の原則にとって有益なものであるかどうか」にある。したがって、査察の結果、有益と認められたらお咎めなし、不利益があると判断されたら取り締まりの対象となる。ただし、後者の場合、対応を間違えると「熱狂」再燃への危険性があるため、注意を促している。

このように、この箇所では、ホーホマンの集会とそこでの説教そのものではなく、その内容を吟味せず闇雲に警察権力を投入した政府や聖職者の態度が問題視されていることが見て取れるのである²⁴。

こうしたユングの見解に照らせば、彼のなかでは、テルステーゲン自らが主宰した集会には問題がないと判断していたと推察される。また、次の例もそうしたユングの判断に影響を与えていたと考えられる。すなわち、1750年代に日曜日や教会の祝祭日などに集会を開催したテルステーゲンと教区との対立が表面化したとき、それがきっかけで1754年、彼の集会がプロイセン政府より派遣された上級宗教局委員の査察を受けることになった、しかしそのときの講話の内容は査察に訪れた人物の共感を勝ち得て、問題ないという判断が下されたという一件である²⁵。おそらくユングは、こうした事実も聞き知っていたと思われる。しかも当時行われた数々の講話はその後著作として出版されているため²⁶、信奉者との交流があったユングがテルステーゲンの集会の開催実態を知らなかったとは考えにくい。

とはいえ、問題のある分離主義的な集会の開催に、政府や教会当局が神経を尖らせていた時代である。ユングは、テルステーゲンの信仰活動の有益さと正当性を個人的には認めつつも、いわば一種の配慮から、否定的評価につながりかねない事実への言及を避けたのではないだろうか。ここにはテルステーゲン評価の際に「熱狂」Schwärmerei という語の使用を避けていたのと同じ態度が窺えるのである。

ここまでの検討結果を踏まえると、ユングの「非党派的」な評価姿勢には若干の偏りがあったようにも見えるが、看過してはならないのは、テルステーゲンを再評価の俎上に載せ、肯定的な部分に光を当てようとしていたユングの姿勢が浮かび上がることである。

2-3. 人々との交わり

テルステーゲンに対する肯定的な評価のまなざしは、次の引用にも表れている。ここでは、自らは財を持たず、職業生活の傍ら最低限の質素な生活を送る一方で、貧しい人々には慈愛の精神を持って施し、助言し、彼らの日々の生活に寄り添っていたことが語られている。

テルステーゲンは、愛という真の精神に則ったとても慈悲深い人物だった。彼は、リボン織りでわずかに得られる以外の何の財産も持たなかったが、多くの貧しい人々にパンを施し、彼らに仕事を与えた。彼の家では多くの貧しい子どもたちが仕事とキリスト教のために指導を受けたのである。誰に対しても助言や行為を通じて援助した。というのも、彼は世間に関する的確な知識をたくさん持っていたからである。人々はそうした知識が彼の元で得られるとは思ってもいなかった。一言で言えば、彼は多くの人びとに慕われた人物だった。彼はどの身分の人びとにおいてもキリスト教に榮譽をもたらしたのである。(JT281f.)

このようにテルステーゲンは、世間から孤立して自らのことだけ考えて信仰の道を歩んでいたわけではなく、世間との一定のつながりのなかで、人々の信仰の促進のために尽くしていた。第1章第2節で述べた厳格な神秘主義からの変化はここにも見られると言えるだろう。ユングの関心を引いたのは、このように社会との接点を持ちながら、社会に影響を与えていた点ではないかと思われる。

以上のように、本章の検討の限りでは、ユングが主人公テーオバルトをして「当時はテルステーゲンの教えがとても純粋で非の打ちどころのないものと思われた」(JT280)と言わしめているのも頷ける。しかし、この物語において、テーオバルトがテルステーゲン信奉者となることはなく、あくまでの一定の距離を置き続けている。これは、ユング自身の現実の姿であったと同時に、主人公テーオバルトがさまざまな信仰者との出会いを通じて成長し、理想に掲げる「中間の道」を歩みつつあったことを示すメルクマールでもある。

では、テルステーゲンあるいはその信奉者たちの何が、どのような観点から批判的に検討されているのだろうか。以下、順を追って見ていきたい。

3. テルステーゲン批判とその背景

本章ではユングのテルステーゲン評価のうち、批判的に評価されている点に着目して考察を進める。ユングは「非党派的に判断を下し、純粋な真の宗教にどこまでも忠実であろうとするならば、テルステーゲンといえども、さまざまな不純物を自らの教えと結びつけ

ていた、と正直に言わねばならない」(JT280)と述べている。すなわち、批判点を述べるに際して、あらためて「非党派的」に評価するという方針を確認しているのであるが、そのうえで二つの問題が指摘されている。

3-1. 非婚と孤独

一つ目は、結婚に関する問題である。テルステーゲンは信仰に生きるための決断として生涯独身を貫いたが、信奉者に対して「孤独」Einsamkeit を推奨したことが、結果として信奉者の結婚を妨げる帰結を招いた、という批判である。

テルステーゲンは結婚しない人生にたいして好意的だった。そうすることで多くの人びとが幸せな結婚をするのを妨げた。彼は孤独(Einsamkeit)を推奨したが、それはイエスの精神にそぐわないことだった。というのも、イエスは、人々のもとで、あるいは人々とともに行動し影響を与えることで、一人一人の幸せと全体の幸せにつながることをするよう促しているからである。(JT280)

ユングは、テルステーゲンの考え方はイエスの本来の教えから矛盾しているとして、さらに次のように続ける。

キリスト教徒は、ときおり人々から距離を置くようにと言われていた。娯楽から気を逸らせ、精神を集中し、眠らずに祈りを続けることで新しい力を得て、その後ますます実り豊かに影響を及ぼすことができるようにするためである。しかしテルステーゲンの教えによれば、静寂のなかで省察し、あまりに多くの刺激を受けないようにするためには、できる限り人々から距離を置かねばならず、独身でいる方がよいというのである。(JT280)

ユングはここでキリスト教徒に孤独が求められた理由を具体的に説明し、テルステーゲンの教えを再考するように促している。ただし、注意しなければならないのは「非婚」と「孤独」の推奨に対する批判は、テルステーゲンのみならず、神秘主義に対して向けられた批判でもあったということである。というのも、ユングは1799年に刊行されたシュタールシュミット(1740-1826)²⁷の伝記にある論考を序文として書き、そこで同じような批判を展開しているからである。

ある論考とは「神秘主義における通常の諸概念の修正」Berichtigung der gewöhnlichen Begriffe von der Mystik(1799)²⁸のことである。このなかでユングは、従来の神秘主義が抱える問題を指摘し、時代に即した真の正しい神秘主義の形を提案しようと試みており、このような神秘主義に相応しい人物こそがシュタールシュミットだとして、伝記本文への橋

渡しをしている。注目したいのは、この論考の冒頭で神秘主義における評判の悪い問題として「非婚」*das ehelose Leben*、「孤独」*die Einsamkeit*、「貧しさ」*die Armut*の三つが挙げられていることである²⁹。そしてユングはこれらの点について「健全な理性」*die gesunde Vernunft*³⁰を用いて考えるように促す。前者の二つが『テオバルト』におけるテルステーゲン批判の一点目と合致していることは言うまでもない。この論考でのテルステーゲンは「神秘主義の真の改革者」*ein wahrer Reformator der Mystick*（原文ママ）³¹として肯定的に評されてはいるが、ここでもまた「非婚」と「孤独」に生きた人物として引き合いに出されているのである。

かつてこの世を生きた、もっとも純粋で最も優れた神秘主義者の一人、故ゲルハルト・テルステーゲンは、ここにおいて、一つの優れた実例として役に立つことだろう。彼もまた神の現在のなかで生を送り、非常に厳格な意味で、純粋で真なる神秘主義を実践した。（中略）彼は日々の仕事を誠実に成し遂げた。それをさらに遂行するために、神秘主義的な死と否定という困難な道を歩んだ。もし結婚していたら、この仕事にここまですべてをささげることではできなかつただろう。神意を果たすために、彼は——救い主の実例にしたがって——長きにわたり、まず孤独の中で修業し、独学で学ばなければならなかつた。

しかし、テルステーゲンがそうしたからといって、結婚せず、孤独に、世間から離れて暮らそうとすることが誤りであることは、明々白々である。宗教的な修行というのは、地上の神の国のためによりいっそう有用になるという目的のための手段に過ぎないのであって、決して目的そのものではないのだ³²。

興味深いことは、テルステーゲンが独身の道を選び、孤独のなかで厳しい修行を行ったこと自体を否定しているのではなく、彼が選んだ道はキリスト教徒に共通した目的に至るための一つ的手段に過ぎないとして、相対化する視点が見られることである。そして、テルステーゲンのすることをただ模倣すればよいという考えを戒めているのである³³。

この論考は『テオバルト』の刊行から15年後に書かれたものである。問題視している点は同じであるが、テルステーゲンに対する評価が変わったと見ることもできるかもしれない。しかし「独身」と「孤独」に対する批判には、当初からテルステーゲンだけではなく、神秘主義の厳格な教えとその絶対視への批判、さらには信奉者への批判も含まれていたと言えるのではないだろうか。というのは、次に挙げるテルステーゲン批判も、その矛先は、神秘主義の教えや信奉者たちにも向けられているように思われるからである。

3-2. 分離主義に対する批判

その批判とは「分離主義」*Separatismus*に対する批判のことである。ユングが二つ目の問

題として指摘している「分離主義」は、この時代の神秘主義に感化された信仰者にしばしば見られる傾向であった。『テオバルト』では次のように述べられている。

テルステーゲンもまた、気づかないうちに（unmerkbar）分離主義に向かった。彼の信奉者は、外的な手段によって完全性に至ろうとしない。そうすることで、あちらこちらで無秩序が生まれるきっかけを作っている。これこそ彼らに特に抗議しなければならないことである。（JT280）

ここでユングは、「気づかないうちに」という副詞をはさむことで、テルステーゲンが明確な意図をもって分離主義に走ったわけではないと示唆し、彼を免罪しているようにも見える。しかしながら、晩年には和解したとはいえ、テルステーゲンが長い間、教会から距離を置いていたことは事実である。結果として信奉者にそうした傾向を促したという批判は免れえない。

ただし、ここで注目したいのは、テルステーゲンの信奉者が「外的な手段」によって完全性に至ろうとしないという指摘である。「外的な手段」という抽象的な表現は、説教やさまざまな儀式を含む公的な教会制度全般のことを意味していると考えられる。公的な教会組織から離れ、分離主義的な傾向を持った信仰グループの危うさは『テオバルト』でたびたび語られる。例えば、第1部第1章の「熱狂主義の歴史」においては、説教師ホーホマンの信奉者たちがとても純粋であったとしながらも、指導者の死後、彼らはすぐに熱狂的な狂信状態に陥ったと指摘し、次のように述べている。

宗教もまた、外的な教会制度や儀式や信仰告白がなければ、どんなに純粋で高貴であっても存続できない。これは永遠の真理である。それゆえまさに、分離主義（Separatismus）とすべての特殊なゼクト（Sektirerei）は、その活動がどんなに純粋で神聖な形で始められようとも、良い結果を生むことは滅多にないのだ。（JT30）

本来ユングは、こうした分離主義が生まれる最大の原因は、公的な教会制度が正しく機能しておらず、聖職者が墮落していることにある、と考えていた³⁴。これはしかし教会制度自体を否定する姿勢ではなかった。上記の引用のように、歴史的事実 に即して、分離主義は教会制度を離れてしまったがゆえに狂信に陥る、という認識にあったからである。だからこそ、分離主義に陥ったテルステーゲンの信奉者たちに警鐘を鳴らし、彼らの振る舞いに批判を加えていると考えられる。

このように見てくると、テルステーゲン批判はその信奉者に対する批判と表裏一体の関係にあったと言えるだろう。

4. テルステーゲン信奉者への批判とその背景

ただし、テルステーゲン信奉者は一方的に否定されているわけではない。彼らは「すべての敬虔主義者のなかで最高の人々」(JT280)であり、小説にたびたび顔を出すユング自身も「そうした事情(論者: 独身主義や分離主義の問題)があるにもかかわらず、テルステーゲン信奉者たちの素晴らしい性格を観察していると、そうした問題はすべて消え失せてしまう。これほど気品のある人々に出会ったことはこれまで一度もない」(JT280)とすら評している。ユングはテルステーゲン信奉者に対してもあくまで「非党派的」な態度で評価に臨んでいるのである。

しかしながら「非党派的」という点では同じでも、テルステーゲンに対する評価が肯定的な方向に傾いていたのに対して、信奉者たちに対する評価はどちらかと言えば否定的な方向に傾いている。ここに、ユングと信奉者との現実の人間関係が影を落としているのは確かだが、ここで考察したいのは、ユングが彼らを否定的に評価する理由についてである。

本章では、信奉者が、間接的にではなく、直接的に批判されている箇所注目し、その内容を検討することで、ユングの批判が最終的に「熱狂」に対する問題意識とどのようにつながっているかを考察する手がかりとしたい。

4-1. 個人崇拜の問題

テルステーゲン信奉者に対する批判は主に二つの点に集約されていると考えられる。もちろん、その二つは密接に関連しているが、まずは個別に見ていきたい。

一つ目の批判は、盲目的な個人崇拜の問題として捉えることができるだろう。これは、信奉者たちの関心が、救い主イエス・キリストではなく、テルステーゲンその人に向けられていること、いわば「イエスのまねび」ではなく、「テルステーゲンのまねび」となっていることへの批判である。それとは対照的に描かれているのが、主人公テーオバルトの姿勢である。

テーオバルトは、自らのことをテルステーゲンの信奉者とは決して言わなかったが、彼の教えは、テーオバルトの信仰をいっそう堅固にし、より明確に方向づけた。彼はテルステーゲンの教えの真なる部分を受け入れたが、打穀のあとのもみがら、あるいは刈り取った後の切り株と判断したものは残していった。(JT282)

テーオバルトは、テルステーゲンの教えを自らの判断に照らして取捨選択し、真なる部分と考えられるもののみ受け入れて、それ以外の不要と思われる部分には関心を示さない。いわば、自らの理性にしたがって対象を吟味し、判断を下しているのである。物語の展開に即して見るならば、主人公テーオバルトのこうした態度を可能にしたのは、第1部から

第2部第5章に至るまでの間、数々の「熱狂」の渦に巻き込まれながらも、それらの困難を切り抜けてきた経験の成果に他ならない。

この場面ではしかし、そうした態度こそがテルステーゲン信奉者たちの不興を買ったとされる。そしてテーオバルトが受け入れなかったとされる事柄についての具体例の話が続くが、それはテルステーゲン自身の個人的な生活習慣、彼特有の表情、歩いたり立ったりする時の身のこなしの癖といった類のものである。例えば、テルステーゲンは弱っていた胃を強くするために、ときおりコップ一杯のポンタック（ワイン）を飲んでいて、信奉者たちはそれを真似してポンタックを飲んでいたので、同じようにしないテーオバルトに我慢がならなかったのだという（JT282）。

ここで語られるいずれの例も、信仰の本質と関係がないことは一目瞭然である。しかし、そうした自覚のない信奉者たちは、テルステーゲンの「表情や身振りのなかに何らかの意味を探し求めようとして、大失敗した」、すなわち「世間のみんなの前で笑いものになって」しまい、「彼らの普段の良い行いにも不名誉な汚点がつくことになった」と語られる（JT282）。

このように信仰の本質と関係のない点に関しては、独特のユーモアを交えた批判が展開されている。信奉者たちのこのような態度を、小説のなかで敢えて取りあげて批判する必要はなかったようにも思われるが、こうした盲目的な個人崇拜というのは、程度の差こそあれ、狂信に至る危険な萌芽を胚胎しており、キリスト教の評判全体に波及する可能性を持っている。こうした危機感こそが、ユングに批判の筆をとらせた理由の一つだったと考えられる。

4-2. 「聖なる輝き」と「真のキリスト教徒」

信奉者に対するもう一つの批判は、「聖なる輝き」Heiligenschein についてである。これはテルステーゲンとその信奉者を評価する際に何度か使われている表現だが、まず注目しておきたいのは、テルステーゲンの話題が始まる直前、すなわち第5章の冒頭の場面である。ここでは第2部前半のハイライトとなる狂信的な熱狂集団の顛末の総括がなされ、それに続く形で「真のキリスト教徒」について語られる。

本来の真のキリスト教徒は、世間の目につくことはいっさいない。彼らはあらゆる身分、あらゆる階層のなかに散在している。金切り声を上げることはなく、言葉数も少ない。絶えず善き行いを通じて周囲を照らす。衣服や特殊な生活態度によって他人から自分たちを目立たせようとするものもない。自分たちの教会や市民の集まりから遠ざかるものもない。（…）彼らは聖なる輝き（Schein der Heiligkeit）が表に出ないように注意を払いながら、虚栄心そのものも入念に消し去るのである。誰にでも善き行いを為し、それを隠しもしないが、見せびらかすものもない。最良の臣下であり、最高の配偶者であり、最高の両親であり、最高の隣人である。読者よ！そういう人を見つけ

たら、神に祈りを捧げなさい。あなたは真のキリスト教徒を見つけたことになるのだから。しかし、その人が何を信仰しているかを尋ねるのはやめなさい³⁵。(JT275f.)

上掲の引用から、ユングがイメージしていた「真のキリスト教徒」のおおよその全体像が、そして、日常どこにでも見かけそうな、きわめて素朴な信仰者の姿が浮かび上がる。

「真のキリスト教徒」は教会や社会から離れて孤独な隠遁生活を送る必要はない。独身である必要もなく、分離主義に走ることもない。また、社会階層との関係では自らの経験則として「農民や職人のなかには大勢いるが、中産階級のなかではその数がずっと少なくなる。高貴な人々、すなわち貴族や君主の間にはもっとも数が少ない」(ST276)という。

ここで注目したいのは、「聖なる輝き」への言及がある箇所である。「聖なる輝き」が外に現れ出ないようにするというのは、いったいどういうことを意味するのだろうか。前稿では、悪意のある熱狂者に対してこの語が用いられた箇所を引用し、それを「見せかけの神聖さの陰で」*unter dem Schein der Heiligkeit* (JT229) と訳したが³⁶、上掲の箇所で用いられている表現は、それとはニュアンスを異にする。

ここでの「聖なる輝き」とは次のようなものと理解できるだろう。すなわち「真のキリスト教徒」からは、普段の信仰姿勢を通じて、自然と光り輝くオーラのようなものが発せられる。しかし彼らは敢えてそれを覆い隠す、言い換えるならば、自らの信仰が人目を引かないように細心の注意を払っているということである。しかし、なぜそのような態度が必要とされるのだろうか。

この点に関しては、以下の引用箇所とあわせて理解する必要があるだろう。

たしかに敬虔主義者、熱狂者、口先だけの信仰者の間にも非常に善良な人々はいる。善良なキリスト教徒 (*gute Christen*) もいる。しかし、彼らはたいていの場合、聖なる輝き (*mit einem heiligen Schein*) で覆われている。このような輝きは、実のところ、役に立つどころか、多くの害を及ぼすことになる。世間の批判、すなわちそうした人々の過ちや愚かさを、その人々自身ではなく、宗教のせいにする批判を引き寄せてしまうからである。これはとんでもないことである！ (JT276)

ユングはここで「敬虔主義者」、「熱狂者」、「口先だけの信仰者」のなかに「善良な人々」ないしは「善良なキリスト教徒」がいることは認めている。しかし彼らのなかに「真のキリスト教徒」がいるかどうかは明言していない。こうした評価に影響を与えているのが「聖なる輝き」であることが分かる。この表現にも「見せかけの神聖さ」というニュアンスは含まれていないだろう。しかし「真のキリスト教徒」から発せられる光とはまた異なるものと思われる。

「善良なキリスト教徒」の光とは、自然に放たれる輝きではなく、敢えて光ろうとする一種のひけらかしのような輝きのことではないだろうか。その輝きは、悪意はないものの、

得てして人々の誤解や批判ないしは反感を招きやすい。そうした評価が、単にそのひと個人の責任に帰せられるならまだよいが、実際には「善良なキリスト教徒」という普段の評価が災いし、よくも悪くもキリスト教全体の評価に直結する恐れがある。上掲の引用では、このような懸念が示されていると読むことができるだろう。

以上の点を踏まえて、あらためてテルステーゲン信奉者に対するユングの評価に目を向けたい。そうすると、テオバルトがテルステーゲン信奉者にならなかった理由についても、まさにこの「聖なる輝き」とその影響が関係していることが分かるのである。

聖なる輝き（Heiligenschein）は、嘲笑者がテルステーゲン信奉者たちを誹謗中傷する事態を招く。嘲笑者は、通常の間人が犯す過ちに比べれば何でもないような弱点を突いてくるが、信徒たちはその聖なる輝きによって他の人の場合よりも注目を浴びやすくなり、それゆえにこそ、その弱点は非常に強く非難されてしまうのだ。テオバルトは、まさにこうした理由から、自分らをテルステーゲンの信奉者とは決して言わなかったのである。（JT280）

テルステーゲンが、同時代の信仰者としてしばしば比較されたツィンツェンドルフ伯爵（1700-1760）とは異なり、組織化された教団の指導者ではなかった点は強調しておかねばならない。しかし、手紙による牧会や集会での講話、さらには著作による影響が広範囲に及んだ結果、彼の教えに共感する信奉者の数は徐々に増えていった。そうした信奉者たちはいつしか「テルステーゲン派」Tersteegianer と呼ばれるようになる。こうしたグループが形成されることで、彼の教えに忠実であるか否かを基準とした仲間意識が強まり、他の信仰者との間には境界が生まれる。テルステーゲンから素朴に放たれていた「聖なる輝き」に、彼の死後、テルステーゲン派の存在を誇示する信奉者たちの強い意識が重なり、そこにテオバルトが批判したような個人崇拜が見受けられるようになったとき、そうした「聖なる輝き」がキリスト教を批判する同時代の人々の標的となるのは当然だった。テルステーゲン信奉者のこうした態度が、自らの信仰を目立たないようにし、謙虚に正しく生きる「真のキリスト教徒」にそぐわないことは明白である。テオバルトがテルステーゲン信奉者と言わなかったのは、彼らが放つ「聖なる輝き」がこうした問題を孕んでいることを見て取ったからだと考えてよいだろう。

『テオバルト』という小説は、狂信を引き起こす「熱狂」の問題と同時に、「理性」によって信仰を脅かす「不信仰」（無神論や理神論）という、18 世紀後半のキリスト教が直面していた二つの問題と真正面から対決している。ユングのテルステーゲン評価では「熱狂」が宗教に必要な要素とみなされ、肯定的な意味での「熱狂」Enthusiasmus を吹き込む存在としてのテルステーゲンが評価されているのを確認した。

しかし本章で検討した信奉者に対する評価では、テルステーゲンを個人崇拜し、いわば自らの理性による主体的な判断ができない存在として問題視されていた。なぜなら、こう

した態度は一步間違えると「狂信」に陥りかねない危険性を孕んでいたからである。彼らが放つ「聖なる輝き」もそうした危険性と無縁ではなかった。信奉者たちのこうした傾向は、「不信仰」にその存在基盤を揺るがされ、体力を消耗しつつあったキリスト教の衰退に追い討ちをかけかねない問題であった。

このように考えるならば、テルステーゲン信奉者への批判には、やはりユング個人との人間関係だけでは説明のつかない、時代の大きな文脈におけるユングの問題意識が強く表れていることを見落としてはならないだろう。

おわりに

本稿では、ユングによる「非党派的」なテルステーゲン評価を検討し、彼への批判については、もっぱらその信奉者に強く向けられていたことを確認した。その際に検討した「真のキリスト教徒」の説明との関連で、最後に少し今後の展望を描いておきたい。

第4章では、テルステーゲン信奉者への批判理由を探る手がかりとして「真のキリスト教徒」の説明にある「聖なる輝き」のニュアンスに着目して考察した。「真のキリスト教徒」についての理解が重要なのは、当時のユングが理想に掲げていた「中間の道」を進む存在とされているからであるが、「真のキリスト教徒」への言及があるのは、本論で検討した箇所だけではない。また、他の箇所では別の観点からの説明もなされている。

いくつかの論点のうち、特に重要と思われるのは「真のキリスト教徒」にとっての「理性」の問題である。これは「中間の道」における理性の位置付けの問題でもある。アルブレヒト・ビルクナーは「不信仰」と「熱狂」の間にあるとされる「中間の道」について「理性の過剰と理性の過少の間」とコメントを付けているが³⁷、はたしてそうだろうか。「中間の道」における「理性」は決して量的な問題に還元されるものではないように思われる。

「不信仰」としての理神論や無神論における「理性」は、いわば信仰を否定する理性である。それに対し、「熱狂」における「理性」は信仰を正しく導くための理性である。キリスト教との向き合い方の点で質的に異なるからである。

もちろんどちらの理性も全くの別物ではないが、「中間の道」に必要とされるのは後者の「理性」、ユングの言葉で換言するならば「キリスト教的な理性」*die christliche Vernunft* (JT204) のことである。テルステーゲンを猿真似し、信仰の道にいたる手段を目的そのものと誤解していた信奉者への批判は、まさにこの「キリスト教的な理性」の欠如が指摘されたケースと考えられるだろう。こうした「理性」に関するユングの理解に関しては、今一つ考慮すべき点がある。『テオバルト』を執筆したときのユングが、カントの著作と出会って大きな転機を迎える前のユングであり、自らが信仰における理性の問題をめぐって悩んでいた時期にあったという点である。「中間の道」における「理性」の問題については、こうした点も踏まえつつ、別の機会に検討することにしたい。

テキスト

Jung-Stilling, Johann Heinrich: Theobald oder die Schwärmer. Johann Heinrich Jung genannt Stilling. Sämtliche Schriften. Band 6. Hildesheim [u.a.] 1979. 本文および注で引用する際には JT と略記し、横にページ番号を添えた。

-
- ¹ テルスターゲン作詞の賛美歌はヘルンフート同胞教団の賛美歌集にも採用された。Vgl. Beyreuther, Erich [u.a.] (Hg.): Nikolaus Ludwig von Zinzendorf. Materialien und Dokumente. Reihe 4 Band III. Herrnhuter Gesangbuch. Christliches Gesang-Buch der Evangelischen Brüder-Gemeinen von 1735. Zum drittenmal aufgelegt und durchaus rediviert. Teil I. Hildesheim und New York 1981, S. 516f.
 - ² Vgl. Brecht, Martin u. Deppermann, Klaus (Hg.): Geschichte des Pietismus. Der Pietismus im achtzehnten Jahrhundert. Bd. 2. Göttingen 1995, S. 391.
 - ³ 拙論「ユング＝シュティリングの敬虔主義批判—エルバーフェルト体験と『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活』—」、大阪大学言語文化研究科『ドイツ啓蒙主義研究 16』、2019 年、21-34 頁。
 - ⁴ ユングの代表作として知られる自伝的小説『ヘンリヒ・シュティリングの生涯』全 6 巻には「テルスターゲン」の名前は一度も登場しない。エルバーフェルト時代の出来事が描かれた第 4 巻『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活』(1789) に、一度だけ「テルスターゲン信奉者」という表現が出てくるのみである。ゲーテ、ラーヴァーター、ヤコービ兄弟らが当地を訪れた際にユングも同席したある会合が開かれたが、そこに参加した人物の一人を紹介する説明のなかでその表現が使われている。小説のなかで実際の名前は伏せられているが、この人物は、後にテルスターゲンの伝記を書いたヤーコプ・ゲオルク・テシェマハー Jakob Georg Teschemacher (1710-1782) と考えられている。
 - ⁵ Vgl. Hahn, Otto W.: Jung-Stilling zwischen Pietismus und Aufklärung. Sein Leben und sein literarisches Werk 1778-1787. Frankfurt am Main[u.a.] 1988, S. 670f. u. 696.
 - ⁶ Vgl. Vinke, Rainer: Johann Heinrich Jung-Stilling (1740-1817) und Gerhart Tersteegen (1697-1769). In: Frömmigkeit unter den Bedingungen der Neuzeit. Festschrift für Gustav Adolf Benrath zum 70. Geburtstag. Darmstadt und Kassel 2001, S. 169-186. ヴィンケはさまざまな資料を手がかりにユングが 1762 年 8 月 1 日から 1763 年 4 月 12 日の間の時期に初めてテルスターゲンの著作を読んだと推察している。テルスターゲンへの言及はないものの、この時期のことは自伝的小説の第 3 巻『ヘンリヒ・シュティリングの遍歴時代』に描かれている。
 - ⁷ 拙論「ユング＝シュティリングの「熱狂」評価—『テオバルトあるいは熱狂者たち』(1784/85) を手がかりに—」、大阪大学言語文化研究科『ドイツ啓蒙主義研究 18』、2021 年、23-24 頁。
 - ⁸ 日本語で読めるまとまった紹介としては以下を参照のこと。石本岩根「ゲールハルト・テルスターゲンの生涯「わが主のみまへに」の作詞者」、九州大学独仏文学研究会『独仏文学研究』第 11 号、1961 年、32-40 頁。この節では以下の文献も参照した。Vgl. Brecht, Martin u. Deppermann, Klaus (Hg.): a.a.O., S. 390-410.
 - ⁹ ドイツ、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の町。デュースブルク近郊の町でライン河の西岸に位置する。ユングはオランダ名の Meurs で表記している。
 - ¹⁰ ドイツ、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の町。デュースブルクの南に位置するライン河西岸の町。
 - ¹¹ 後年になるが、ユングは、雑誌『灰色の男』のなかで、ぜひとも読むべきテルスターゲンの著作として実に 10 作品ものタイトルを挙げている。Vgl. Jung genannt Stilling, Johann Heinrich: Der graue Mann, eine Volksschrift. In zwei Bänden. Erster Band. Stuttgart 1837. In: Jung genannt Stilling, Johann Heinrich: Sämtliche Schriften. Band V. 7/8. Hildesheim u. New York 1979 (hier, S. 272.).
 - ¹² テルスターゲンと神秘主義の関係については以下の論文を参照されたい。神谷完「信仰の世俗化と文学—ドイツ敬虔主義の場合—」、同志社大学外国文学会『外国文学研究』第 21 号、1978 年、1-17 頁。
 - ¹³ ペーター (ピエール)・ポワレは、フランスの神秘思想家で数多くの神秘主義的著作をドイツ語に翻訳した人物として知られる。通常はピエール・ポワレの名で知られる人物であるが、ユングは「ピエール」の代わりに「ペーター」と表記している。
 - ¹⁴ フェヌロンとマダム・ギュイヨンフランスの静寂主義者・神秘主義者である。ユングは第 1 部第 1 章の叙述のなかで、こうしたフランス経由の神秘主義思想が、ヤーコプ・バーメの潮流とはまた別の

流れとしてドイツに流入し、とくにマダム・ギュイヨンの影響が大きかったと記している (JT19)。それを仲介したのは上述のポワレの翻訳であった。なお、静寂主義についての邦文献としては、以下の翻訳とその巻末の解説を参照のこと。『キリスト教神秘主義著作集 15 キエティスム』鶴岡賀雄・村田真弓・岡部雄三訳、教文館、1990 年。

- ¹⁵ Vgl. Brecht, Martin u. Deppermann, Klaus (Hg.): a. a. O., S. 386-390. 『テオバルト』の第 1 部第 1 章では説教師ホーホマン・フォン・ホーヘナウ (1669/70-1721) の説教や講話に感化された人物として紹介されている (JT27f.)。
- ¹⁶ テルスターゲンはマダム・ギュイヨンやトマス・ア・ケンピスなどの著作も翻訳している。
- ¹⁷ この箇所に批判が含まれているとすれば、それはむしろ神秘主義に対してのものと考えられる。テルスターゲンはホフマンが高く評価したスペインの修道士グレゴリオ・ロペスを模倣して 5 年間禁欲的孤独のなかで修業したと言われるが (Vgl. Wallmann: a. a. O., S. 62.)、こうした修行がどの程度ホフマンの推奨によるものかは定かではない。
- ¹⁸ テルスターゲンは「非党派的」を冠した著作 (Unpartheiischer Abriß christlicher Grundwahrheiten) も遺している。
- ¹⁹ 『テオバルト』では Ter Steegen と綴られているが、現在の綴りである Tersteegen の読みに統一して、以下「テルスターゲン」と表記する。
- ²⁰ 拙論「ユング＝シュティリングの「熱狂」評価」、27-30 頁。
- ²¹ Kluckhohn, Paul u. Samuel, Richard (Hg.): Novalis Schriften. Bd. 3. Stuttgart 1983, S. 589f. (訳は『ノヴァーリス作品集 第 3 巻 夜の讃歌・断章・日記』今泉文子訳、ちくま文庫、2007 年、324 頁を参照した。)
- ²² 拙論「ユング＝シュティリングの「熱狂」評価」、31-34 頁。
- ²³ Vgl. Brecht, Martin u. Deppermann, Klaus (Hg.): a. a. O., S. 386-388.
- ²⁴ 第 2 部第 8 章のテオバルトは、危険な熱狂グループの実態を暴くべく、公的な身分を伏せて潜入捜査している。
- ²⁵ Vgl. Brecht, Martin u. Deppermann, Klaus (Hg.): a. a. O., S. 405-407.
- ²⁶ 雑誌『灰色の男』の下記ページに挙げられたテルスターゲンの著作リストの 5 番目に挙げられているのが講話集『霊的なパンくず』Geistliche Brosamen である。本人の手によるものではなく、集会の参加者によって書き取られたものである。それゆえユングはやはりテルスターゲンが集会を開催し、講話していた事実を知っていたと考えられる。Vgl. Jung genannt Stilling, Johann Heinrich: Der graue Mann, S. 272.
- ²⁷ ジーゲン近郊のフロイデンベルク出身の商人。ヤーコプ・ベーメやテルスターゲンの教えを信奉していた。テルスターゲンとの関係については、以下を参照。Vgl. Zeller, Windfried: Johann Christian Stahlschmidt und Gerhard Tersteegen. In: Lindt, Andreas u. Deppermann, Klaus (Hg.): Pietismus und Neuzeit. Bd. 1. Bielefeld 1974, S. 114-124.
- ²⁸ Jung, Johann Heinrich: Vorrede. Berichtigung der gewöhnlichen Begriffe von der Mystik. In: Stahlschmidt, Johann Christian: Die Pilgerreise zu Wasser und zu Lande, oder Denkwürdigkeiten der göttlichen Gnadenführung und Fürscheidung in dem Leben eines Christen. Nürnberg 1799, S. III-XXXVI.
- ²⁹ Ebd., S. VI.
- ³⁰ Ebd.
- ³¹ Ebd., S. XV.
- ³² Ebd., S. XI-XII.
- ³³ テルスターゲンを模倣する信徒への批判は以下の箇所にも見られる。Vgl. ebd., S. XV-XVI.
- ³⁴ 拙論「ユング＝シュティリングの「熱狂」評価」、30-31 頁。
- ³⁵ この一文は、ユングがフィラデルフィア思想の影響を受けて、真のキリスト教徒はさまざまな宗派や集団に散在し、特定の宗派にのみ存在するわけでないと考えていたことを示すものと考えられる。
- ³⁶ 拙論「ユング＝シュティリングの「熱狂」評価」、33 頁。
- ³⁷ Albrecht-Birkner, Veronika (Hg.): Johann Heinrich Jung-Stilling. „... weder Calvinist noch Herrnhuter noch Pietist“. Fromme Populartheologie um 1800. Leipzig 2017, S. 271.